

非分析哲学としてのホワイトヘッド「有機体の哲学」

吉田 幸司

1. 序

現代英米哲学が分析哲学とその歩みを共にしてきたことは誰しも認めることであろう。19世紀末、ブラッドリーらの絶対的観念論が英米の哲学界を席卷していた中、ムーアとラッセルがそれに反旗を翻し、論理実証主義や日常言語学派などを介しながら、今日まで続く分析哲学の思潮が形成されてきた。一方、ホワイトヘッドは、『数学原理』の功績で現代英米哲学の創始者の一人に挙げられるが、その後の哲学は上記の潮流から分岐し、現代哲学における位置づけが定かではない。特に、論理実証主義者たちが形而上学排斥を唱え始めた1920年代半ばには、「有機体の哲学」と称する形而上学を展開し始め、分析哲学の潮流と明確に袂を分かたつ。ツィーママンもいうように、分析哲学においても特定の時期を除いて形而上学が研究されてきたとはいえ、ホワイトヘッドの形而上学は、分析形而上学からも区別される¹。クワインやデイヴィッドソンなど、ホワイトヘッドの影響を受けた分析哲学者もいるし、分析哲学の土俵でのホワイトヘッド研究もあるが、ホワイトヘッド自身の展開した哲学は、分析哲学の系譜にあるわけではない²。

では、両者はいかなる点で異なるかといえば、その答えは明確ではない。というのも、分析哲学の定義は一義的に定まっていなければ、ホワイトヘッドの哲学がいかなる意味で哲学たりえているのかも明らかでないからである。その哲学は、「現実的存在 (actual entity)」「永遠的客体 (eternal object)」「抱握 (prehension)」など、独自の術語で記述されるばかりか、「感じ」「満足」「人格」「有機体」「社会」といった既存の言葉も、通俗的用法とは異なって使われる。ホワイトヘッド研究においてもそうした用語が使われ、その哲学は、今なお非専門家に対して閉ざされているというのが現状であろう。この背景には、ホワイトヘッド哲学の内容に関する解釈上の問題というよりも、その哲学がいかなる手法のもとに成り立っているのか、なぜそうした術語が使われたのかが不明であるという問題があると思われる³。しかし、いかに壮大な体系が築かれようとも、哲学としての手法に何も基盤がなければ、それは空中楼閣に過ぎない。

本稿は、こうした問題関心のもと、ホワイトヘッド哲学の哲学する手法を明ら

かにする。そのためにまず、対比候補として、分析哲学とは何かについておよそ認められるだろう一般的特徴を概観する(2節)。その上で、それらの特徴に関してホワイトヘッドの哲学はどのように評価できるかを考察することにより、ホワイトヘッド哲学の手法を浮き彫りにしていく(3~5節)。ホワイトヘッド哲学の手法の解明は、ホワイトヘッド研究の反省と基礎づけになるとともに、分析哲学と非分析哲学との差異を際立たせることにも資するであろう。

2. 分析哲学の一般的特徴

分析哲学とは何かに答えるのは容易ではない。分析哲学は定義できないということが、分析哲学者の共通見解にさえなっている。1990年頃からは分析哲学の歴史的研究も盛んになったが、その理由に関して飯田は、「1970年代が終わるころから、中心が失われてその形が見えにくくなっている分析哲学の現在と未来を見通すための手がかりを、この伝統のそもそもの起源に求めようという志向が働いているように見える」と振り返る⁴。以下では、ホワイトヘッド哲学の手法を浮き彫りにするための指標となりうる分析哲学の一般的特徴を抽出したい。

分析哲学の歴史的研究の先鞭をなしたものとして、ダメットの『分析哲学の起源』が挙げられる⁵。本書でダメットは、「分析的伝統のルーツへの一連の哲学的反省」を試み、その源流を、フレーゲを含む、ドイツ語圏の哲学者たちに見出す⁶。その際、分析哲学の特徴として二つの信念が挙げられる。一つは、「思想(thought)についての哲学的な説明は言語についての哲学的な説明を通して獲得され得るという信念」、もう一つは、「包括的な説明はそのようにしてのみ得られるという信念」である⁷。例えば、論理実証主義者、ウィトゲンシュタイン、オクスフォードの日常言語学派も、クワインやデイヴィッドソンに代表されるポスト・カルナップ派の哲学も、この二つの信念を堅持している。この特徴づけにしたがえば、「言語への転回」が起きたときに分析哲学は生まれたのであり、とりわけその最初の明白な例が、フレーゲの『算術の基礎』(1884年)であった。

ここでダメットのフレーゲ解釈に詳細に立ち入る余裕はないが、ダメットが注目しているのは、文脈原理が、「思考様式の探究にではなく、言語への探究を統制する原理として定式化されている」ことである。それは、「語が意味をもつのは文という脈絡においてのみである」というテーゼとして定式化され、探究も、「数に対する名辞を含む文の意義(sense)をいかにして決定できるか」という言語論的な形をとっている。加えて、心的作用とその外部にある思想が峻別されたことに

より、論理学や思考と意味の理論が心理学から区画され、言語への転回が可能となったとダメットは主張する⁸。つまり、ダメットにしたがえば、分析哲学の源流は、フレーゲを経て、哲学の課題が言語分析による思想の分析へ転回したことに存することになるのであり、言語分析は、分析哲学の特徴の一つに挙げられよう。

無論、言語への関心が分析哲学のすべてではない。グロックは、「かれの定義の背後には、哲学の基本的課題はともかくも思考を分析することであるという前提があるが、ダメットはその前提について正当化も説明も行っていないのである」と批判している⁹。また、ダメットへの批判に限らずとも、ムーアやラッセルは言語分析を哲学の主題としていたわけではなく、実在に関わる事柄を分析の対象としていたことを指摘する者も多い¹⁰。

この点に関してフェレスダールは、分析哲学は認識論や存在論、美学など多様な問題を議論しており、ある特定の教説・問題によっては特徴づけられないという¹¹。フェレスダールによれば、分析哲学を特徴づけるのは、「哲学的な問題に取り組む方法」、すなわち「論証（argument）と正当化（justification）に非常に強い関心を寄せているということ」である。分析哲学者は、ある哲学的立場を認めたり拒絶したりする際に、どのような理由があるのかを問う。また、ある立場から何が帰結するのか、その立場がどのように強化されたり否定されたりするのかを問う。言語の分析に関心を寄せるのも、それが、「一連の論証の妥当性にとって決定的に重要な曖昧さとか不明瞭さとかを避けるために必要」だからである。言語分析や概念分析を分析哲学の特徴と同定するなら、例えばラッセルを排除するが、上記の規定は、言語分析や概念分析も包摂できる。

では、論証と正当化とは何か。フェレスダールは論証とは何かを明確に規定していないが、「たんなる演繹的論証以上のもの」だと示唆する。ある哲学の論証は、ある諸前提をもち、そこから結論を帰結している。その際に使われているのが「たんなる演繹的論証」である。だが、哲学の論証は、「たんなる演繹的論証」に尽きるものではない。新たな諸前提が加わると、もともと帰結していた結論は疑われるようになるのであり、哲学の論証は、「たんなる演繹的論証以上のもの」である。

ところで、前提が変わるとき帰結も変わるのであれば、哲学は前提に依拠して相対的になるのではないか。正当化が重要になるのは、この点においてであろう。フェレスダールは、「哲学は、情動とか、人間の態度や知覚のような活動とかの複雑な記述から成り立っている」ことを認める。そしてゲーテの『ファウスト』の一節を引用し、「哲学は、『すべてのものが一つの全体へと織りなされ、互いが互いのなかで働き合い、互いのなかで生き続ける様』をみたがる」と述べる。ただ

し、ここで分析哲学は、明晰さと首尾一貫性を生み出すとともに、「資料(material)」に適合する区別と記述の形式を求める。哲学は、諸科学と同様、一般的結合(general connections)と細部(details)に関する探究を交互にする必要があり、一般的結合の理論は細部に適合しなければならないし、細部は、より一般的な理論にその場を見つけなければならない。ある哲学が正当化されるのは、こうした「反照的均衡(reflective equilibrium)」を通してであるとフェレスダールは主張する¹²。

以上のような特徴づけはフェレスダールだけのものではない。ツィーマンは、分析哲学の弁別的特徴はないと言いつつも、形式論理学の進歩や厳密な論証への敬意を指摘する¹³。飯田も、明晰さや論証を要求し、ある主張に対して意味や理由を問い、論証の不備や不在に目を向ける、といった特徴を分析哲学者の特徴に挙げる。しかも、明晰さに関して、概念の明晰化を例にとり、「問題の概念をそのなかに位置付けることができるような理論を構成することによって、概念は明晰なものとなる」と述べる。その際、「その理論に属する主張とそうでない主張との区別が原理的にはっきりしていること」が理論の客観性の条件である。さもないければ、ある主張を否定しても、それが当の理論に属するかどうかという、決着のつかないかもしれない別の議論を招来するだけで、ルーズな意味での理論になってしまうからである¹⁴。

さて、以上のような特徴は、広く分析哲学の特徴と認められている明晰な議論や経験科学との連携の重視とも符合する¹⁵。それらは、分析哲学の特徴のすべてではないにしても、ホワイトヘッド哲学との比較指標にはなる。次節以降は、それらを指標にホワイトヘッドの哲学する手法をみていこう。

3. ホワイトヘッドの有機体論

『数学原理』は、「論理的分析の全問題について、我々は主にフレーゲに負っている」(PM viii)と記されている通り、フレーゲの手法を継承するとともに、現代論理学の金字塔になった。仮にダメットのいう通り分析哲学の起源をフレーゲに見出すならば、ホワイトヘッドは紛れもなくその系譜の重要な位置を占める。

だが、ホワイトヘッドは言語分析を哲学の手法とは考えず、言語論的転回に赴いたわけではない。『数学原理』以後、彼は自然哲学の諸著作で、我々の直接経験に与えられる与件にもとづいて自然科学を再構成している。『科学と近代世界』(1925年)以降の形而上学でも、ホワイトヘッドは実在の探求を試みていた。

それどころか、ホワイトヘッドは言語に疑念を抱いていた。このことは、彼の

命題論と結びついている。我々が直接経験するのは、複雑で、個々の要素に判明な区別や境界がない所与である。例えば机を知覚するとき、我々が直接見ているのは、モザイク的な感覚質の集まりであろう。せいぜい「あれ」と指示できる程度の様々な色合いを物的に感受しているに過ぎない。しかし我々は、単なる感覚質の諸多を机として規定する。ホワイトヘッドのいう「命題」とは、所与の集まりが「何であるか」を、様々な可能性がある中で「提案 (propose)」し、「～として」規定しようとする存在論的カテゴリーである。裸の事実はなく、事実、いつも観念およびその体系によって解釈されているが、物的感受の経験に始まるプロセスの中で意味規定がなされる。

したがって、言語や知覚主体が予め「それが何であるか」を用意しているわけではない。事実の解釈は多義的で、様々な解釈の可能性がある、どの命題の背景にも「半影」が広がっている。例えば、部屋で読書に集中するとき、様々な所与が与えられているにもかかわらず、本（さらにはその文章）のみを意識している。外から鳥の鳴き声が聞こえていることもあるだろうし、窓から入り込む隙間風を感じているかもしれない。だが、読者は、抽象化を通じてそれらあまり関連のない（重要でない）要素を捨象し、本を本として知覚している。だが、集中力を切らし、鳥の鳴き声に意識を向けるならたちまち、鳥の鳴き声を鳥の鳴き声として知覚し、本は命題化される経験の背景に退く。「～は～である」と命題化される経験の背景には潜在的な無数の要素が覆い隠されており、たとえ何らかの命題を語ったとしても、無数の要因 (factor) が複雑に絡み合った事実 (fact) の一部を、抽象によって切り出しているに過ぎない。「それは美しかった」などと語ろうものなら、指示される所与は「剥き出しのそれ (bare 'it')」へ形骸化するとともに、「それ」が指しているのは、本の内容なのか、鳥の鳴き声なのか、はたまた窓の外に見えた鳥の姿なのか、曖昧になる。言語は常に「省略的」にしか事実を語れない。

ここでホワイトヘッドが強調するのは、事実には明確な境界線がなく、あらゆる存在者が関係づけられているということ、そして、どの存在者も特有の状況の中で意味づけられているということである。「草は緑である」(PR 13) という命題さえも、複雑で多様な、時に自明ではない前提や背景をもっている。暗闇の中や、色覚に障害をもつ人の場合に「草は緑である」とは限らない。仮に草が他の何ものとも関係せず存在したら、日の光に当たることはなく色を失い、重力がなく重さもなくなってしまう。「草は緑である」という命題は、知覚者の身体や草を照らす日の光などからなる環境ないしは状況に依存して成立しているばかりか、雨天など、そうではなかった可能性も背景に携えている。

こうした考えこそ「有機体の哲学」の要諦であり、『科学と近代世界』でロマン主義と結びつけられ提唱された。そこでは、森羅万象が有機的に関係づけられている連帯性のある見事な表現として、ワーズワースやシェリーらの自然詩が引用される。例えばシェリーの「モンブラン」の第1連を鑑賞するならば、日の光は水面にきらめき、川の水は岩にぶつかり水しぶきをあげ、樹々は風にざわめく。何物も孤立して存在せず、他の存在と関係づけられている。我々が感受する所与も、バラバラで原子的な感覚所与ではなく、反射する色、共鳴する音など、質的で体系的な「永遠の客体」で意味づけられている。光の波長や音の振動数等々を分析したところで、具体的な自然とその体験に近づくことはできない。「発想の転換をこそ (The Tables Turned)」でワーズワースが「我々は分析するために殺す」と非難したように、ホワイトヘッドも、自然を、事物の有機的な関係を度外視して諸要素へ分析することを批判する。自然であれ観念であれ、化学分析のように構成要素に分解することは、彼にとって実在から遠ざかることに他ならなかった。

この有機体論に関して、ホワイトヘッドは分析哲学よりブラッドリーの形而上学的思潮の中にある。ブラッドリーにとって、分割不可能な全体である「絶対者」が実在であり、諸部分は実在の多様な現象に過ぎない。ムーアやラッセルは、複合的な全体をその構成要素たる部分へ分析することでブラッドリーに反対したが¹⁶、ホワイトヘッドはそうした分析に批判的で、実在を事物の有機的關係において捉える¹⁷。どの命題の背景にも無数の潜在的要素が潜んでおり、ある命題は事物に対する気まぐれな解釈として提案される。ホワイトヘッドは言語論的転回に与せず、実在の探究という点ではムーアやラッセルとも仲違いしないが、部分への非分析的な姿勢はブラッドリーの思潮を継承している。部分への分析の是非は二つの思潮を区別する指標の一つであり、分析を採用したことで分析哲学に向かう思潮の方が本流から分岐したともいえよう。では、上述したようなホワイトヘッドの有機体論は、彼の哲学観とどのように結びついているのか。

4. ホワイトヘッドにおける言語と哲学

分析哲学の特徴として論証や正当化への強い関心をフェレスダールは提示した。この特徴は、一見、ホワイトヘッドの哲学にも適用できる。『過程と実在』(1929年)で彼は、自身の哲学を「思弁哲学」と呼び、「哲学の図式は、整合的で論理的で、その解釈に関して適用可能で十全であるべきだ」(PR 3)という。哲学の体系は一般理論として整合性や論理を必要とする一方で、細部において経験の諸要素

への適合を含む。「あらゆる体系的思考は、前提から出発しなければならない」（MT 1）のだが、後者の点で、哲学は体系化から出発してはならず、諸前提が正当化される経験の諸要素の「蒐集（*assemblage*）」から始まる（MT 2）。より多くの経験の要素を含み稠密になりながらも、それらを合理的に解釈できる一般性を獲得することによって体系は進展し、体系全体において細部も理解される。

この特徴こそ「有機体の哲学」という名称の由来の一つだが、フェレスダールも、ゲーテを引用し、哲学の有機的なものへの関心を認めているのであった。だが、ホワイトヘッドの哲学は、ある主張と別の主張を判明に区別したりその真偽を判定できたりする記述を心がけていないし、明晰さや首尾一貫性にさほど固執していない。『観念の冒険』（1933年）で彼は次のようにいう。

観念の研究にあたって、頭の固い明晰さへの固執は、事実の複雑な絡み合いを覆ってしまう霧のようであり、感傷的な感じに起因しているということを肝に銘じておく必要がある。やみくもに明晰さに固執するのは、人間の知性が機能する様態についての、全くの迷信にもとづいている。我々の理性的推論は、前提に関しては、わらをつかむのであり、演繹に関しては、クモの糸のように危ういものの上をただようのである。（AI 72）

『科学哲学の形成』（1951年）でライヘンバッハは、「思弁哲学の遺物たる曖昧さのモヤが、論理的分析の方法で訓練されていない人々の眼から、哲学的知識を未だ覆い隠している」と記した¹⁸。一方、『数学原理』の著者の一人は、明晰さへの固執を、事物の有機的関係を覆う霧のようなものとして批判するのである。

では、なぜホワイトヘッドは明晰さに不信を抱いていたのか。彼は、世界が曖昧模糊として、明晰には十全に捉えられないと考えていた。弟子のラッセルに、「君は世界を天気の良いお昼に似ていると思っているが、私は人がまず深い眠からさめる早朝に似ていると思っている」と語ったそうだが、世界は明確に区画できず、明晰に語るときには既に具体的実在を捉え損なっていると考えていた¹⁹。無論、我々は言語によって哲学するのだが、前節でみたように、事象あるいはその経験を命題化するときには抽象化が働き、様々な要因が覆い隠される。語や語句はあくまでも抽象的なものであり、いくら言葉を尽くしても眼前の光景の具体的経験を十全に表現できない。当然、論証も抽象化にもとづいているから、具体的なものが論証されることはない。この点で、哲学において明晰さや論証は第一義的なものではないことになる²⁰。

むしろホワイトヘッドは、言語を特定の環境や状況との連関から切り離さないことを求める。環境や状況との連関は、特に話し言葉において密接である。「暖かい日」を例に考えてみると、その意味は、辞書で「気候や温度が暑過ぎずほどよい日」と言い換えられたり、摂氏何度から何度までと定義されたりするだろう。その場合、世界中のどこでも同義にみえるが、しかし、「暖かい日ですね」と話すとき、テキサスにいる人と、北海に面したイギリスの海岸にいる人とでは、指示される経験は極めて異なる (MT 39)。

確かに抽象を通じて環境や状況との連関を切り離したことは文明化の歩みであり、書き言葉に至っては、環境や状況から抽象され、本にしまいこまれ、様々な時・場所で読まれることが可能になった。しかし、特定の環境や状況から切り離す、行き過ぎた抽象にホワイトヘッドは警鐘を鳴らす (MT 38-9)。「緑」という語の意味は、辞書で調べれば、緑の置かれた状況とは無縁に定義されているし、科学では光の波長によって定義される。だが、特定の春の朝に見る緑の具体的な経験は、ある直接的状況における特定の経験であって、辞書や科学上の定義のように一般化できない。ホワイトヘッドによれば、元来、言語は「この環境におけるその状況に対するこの反応」(MT 38)であり、直接的状況との連関を伴っている。「緑」という語でさえも、現実の状況を離れて一義的な意味をもつというのは幻想であって、特定の現実の状況における緑を指示する。

直接的状況での経験は、結局は抽象的な言語で語り尽くせないであろうが、ホワイトヘッドは、哲学とは「無知なままに抱かれた言説に立ち向かっていく精神の態度」(MT 171) だという。すなわち、「無知なままに抱かれた」とは、「ある言説がそれと関連する無数の状況との関わりでもちうる意味を、十全には理解できていない」(MT 171) という意味であり、ホワイトヘッドにとって哲学はこの意味での無知を超克していく営みであったと考えられる。そのためには、「語や語句は、それらの通常の用法とは無縁の一般性に向けて拡張されなければならない」(PR 4) のであり、哲学的態度とは、「我々の現在の思考に入ってくるすべての観念の適用範囲の理解を拡大しようとする、断固とした試み」(MT 171) であるといわれる。ここには、概念・言語を分析していく姿勢ではなく、むしろ語や語句の意味を拡張して使用していく姿勢が見出せるが、それはホワイトヘッドの哲学においてどのように遂行されているのか。

5. ホワイトヘッドの哲学する手法

ホワイトヘッドは、哲学者を、思弁哲学を拒否する「批判学派」と、「思弁学派」

に分ける。前者は、言語が曖昧さなく一義的に定義されると想定し、辞書の限界内での言語分析に終始する哲学者と特徴づけられる。後者は、直接的洞察に訴え、それをより明示化するような状況に訴えることによってその意味を示唆しようとする哲学者だという（MT 173）。ホワイトヘッドは、前者のような、言語の厳密な意味を特定しようとする姿勢には限界があると考えている。むしろ後者のように、時には隠喩に訴えながら直接的洞察の理解を促し、「辞書を拡張する」（MT 173）ことを肯定するとともに、「哲学は詩に似ている」（MT 174）とまでいう。

では、ホワイトヘッドの哲学する手法と詩は、どのように似ているのだろうか。ホワイトヘッドによれば、詩の鑑賞者にとって、「詩人の言葉は、詩人が喚起したいと思っている視覚的光景や音や情緒を象徴的に指し示している」（S 12）。一方、詩人にとって、「視覚的光景や音や情緒的経験が、象徴的に言葉を指し示している」（S 12）。例えば、樹に関する叙情詩を書きたいなら、森に行き、樹を象徴とし、言葉を紡ごうとする²¹。そうして詠われた詩には、詩人の見た事実としての光景だけでなく、詩人の情緒的経験も表現されているだろう。例えばワーズワースの「水仙」で、そよ風に揺れ、踊る水仙の群れは、ワーズワース自身の歓喜の表現でもあった。それは特定の状況における固有の経験であって、辞書で定義される意味、ましてや科学的分析では、その経験を表現できない。どんなに言葉を尽くしても、その経験を表現し尽くすことはできないのだが、詩人は韻律や隠喩に訴え、言葉の元々の意味を拡張しながら、自らの経験を表現しようとする。

これらのことを哲学に置き換えるなら、実在に関する直接的洞察を象徴とし、言葉を紡ぐのが哲学者ということになる。逆に読者は哲学者の言葉を象徴として、そこで指し示されている事柄を理解したり追体験したりしようとする。ホワイトヘッドにとって哲学は、新しい術語や、既存の言葉がもつ意味の拡張によって、我々の具体的経験や実在の本性をより深く理解し、それを表現する試みだったと考えられる²²。とりわけ、それ以前の哲学では暗がりに覆い隠されていた直接的洞察を明るみに出すことが新しい哲学の務めであり、自身の哲学も、「まだ語られていない深みへの直接的洞察」を、時に隠喩に訴えながら表現しようとする試みだった。この点で哲学は神秘的であり、詩に似ているといわれる（MT 174）。

このようにホワイトヘッドの哲学観の理解を掘り下げてくると、なぜ新奇な術語を使う必要があったのかも浮き彫りになってくる。ホワイトヘッドは、「まだ語られていない深みへの直接的洞察」を表現しようとしたのであって、それを論証しようとしたわけでもなければ、他の何かによって基礎づけようとしたわけでもない。しかし、その際には、実体と属性、個別者と普遍者、主体と客体、物と心

といった伝統的な哲学の用語は不十分だった。彼は、既存の哲学用語や日常言語では覆い隠されている新しい洞察を提示しようとしたが、そのためには、自らの洞察をより具体的に表現しうる新しい言語を作らざるをえなかった。「哲学に必要とされている道具が言語である」(PR 11)のは確かだが、「物理科学で既存の器具が再設計されるのと同じように、哲学は言語をリ・デザインする」(PR 11)。なぜ独自の術語群とその哲学体系を構築したかといえば、旧来の用語にまわりつく暗黙の前提や考え方を乗り越え、より具体的な实在へ接近するためであったと答えられる。

無論、ホワイトヘッドも自身の術語を既存の哲学用語や日常言語に関連づけようとしているが、完全に翻訳することはできない。それらでは語り尽くせない薄暗い洞察を示そうとしているからである。したがってホワイトヘッド研究においても術語を使わざるを得ないのは理由がないわけではない。ホワイトヘッド哲学の直接的洞察を理解する最良の方法は、その体系に入り込むことだからである。

それにしても、以上のようなホワイトヘッド哲学の手法は何に由来しているのだろうか。様々な由来が考えられるのはもちろんだが、プラトンの『ティマイオス』の影響があったことは疑いない。主著『過程と实在』の副題は「宇宙論への試論」であり、人類史上、最も影響力のあった宇宙論として『ティマイオス』とニュートンの『自然哲学の数学的諸原理』が挙げられる。ホワイトヘッドによれば、科学的な細部の陳述とみなされるなら、『ティマイオス』はニュートンの宇宙論に比して馬鹿げている。しかし『ティマイオス』では、哲学的な思慮深さがその細部の欠陥を補っており、一つの寓意として読まれるなら深遠な真実を語っているとホワイトヘッドは評価する (PR 93)。ホワイトヘッドの企ては、『ティマイオス』の現代版を打ち立てる試みだったともいえるのであり、自身の哲学も一つの寓意として読まれることを期待していたのではないか。「ギリシア人たちが自然の現実性に関する究極の性質を表す用語を必要としたとき、彼らは水や空気、火、土といった用語を使わなければならなかった」(MT 49) とホワイトヘッドがいうとき、自身の哲学もまた、「感じ」「満足」「社会」といった用語をその通常の意味を拡張して用いて、具体的な経験や究極的な实在の本性を指し示そうとしていたと考えられる²³。

よって、ホワイトヘッドの哲学は、想像力を働かせ、読者自身の具体的な経験や世界の事象に照らし合わせながら読まれなければならない。そうすることによってホワイトヘッドの術語は、直接的状況がもつ特殊性を損なうことなしに、様々な特定の状況における経験を指し示す一般観念となりうる。それはちょうど、詩

が、ある状況における詩人の特定の経験の表現であるにもかかわらず、読者たちがその経験を追体験できることに似ている。哲学の場合には、我々は、ホワイトヘッドの哲学を通じて、実在に関する直接的洞察を理解しようとすることになる。「直接経験の解明がいかなる思想にとっても唯一の正当化になるものである」（PR 4）とホワイトヘッドはいうが、その直接経験とは、我々ひとりひとりの個々の経験すべてである²⁴。この点にこそ、ホワイトヘッド哲学が、難解でありながらも、その読者を魅了してやまない理由があるといえるだろう。

6. 結語に代えて

以上、本稿では、言語分析への関心や、明晰さや論証の重視といった分析哲学の特徴を概観した上で、それらを指標としてホワイトヘッド哲学の手法を浮き彫りにしてきた。もとより分析哲学を明確に規定することはできないのだが、分析哲学が、今日、英語圏の哲学、あるいは哲学界全体において中心的な位置を占めるのに対して、ホワイトヘッドの哲学およびその研究は、依然として分析哲学から距離を置いている。分析哲学の脈絡の中で研究することはもちろん可能であるにしても、その場合、ホワイトヘッド哲学本来の姿ではなくなってしまう。こうした中、本稿の意義は、ホワイトヘッド哲学の哲学としての特有性を浮き彫りにした点にある。詩にも似た哲学として、「まだ語られていない深みへの直接的洞察」を提示し、その理解を個々人の直接経験に訴える性格は、ホワイトヘッド哲学が、宗教間対話やプロセス神学など、宗教との関わりの中で継承されてきたことの原因にもなるだろう。果たしてそうした性格が「哲学」と呼ばれるにふさわしいかは一つの問題だが、分析哲学とは異質な哲学を提示し、その哲学としての手法を浮き彫りにしたことは、今日における我々の哲学の営みを反省する上でも意義あることだと考えられる。しかも、どちらも英国ヘーゲル主義を批判的に乗り越えていこうとした点で同じ出自をもっていたという史実は、別の現代哲学史もありえたことを示唆している。ラッセルやクワイン、デイヴィッドソンなど、分析哲学の重鎮がホワイトヘッドの教え子だったという点では、分析哲学とホワイトヘッド哲学は無関係ではなく、むしろその差異を対比的に際立たせることによって、両哲学に有益な成果も期待できる。そのための個々の研究は今後の課題にしたい。

なお、本稿では、ホワイトヘッドの哲学する手法に焦点を絞ったため、実際にその哲学がどのような「まだ語られていない深みへの直接的洞察」を提示しているかは主題的に論じなかった。ホワイトヘッド自身のテキストがそれを指し示し

ているのはもちろんのこと、ホワイトヘッド研究のほとんどがそうした内容に関する研究である。したがって、ホワイトヘッド哲学の内容に関する独自性は、本稿以外の拙論を含め、他の研究を参照願いたい、内容に関する研究は、ホワイトヘッド哲学の哲学としての手法の反省的研究とともに進められる必要があると筆者は考える。

* 本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

* 本稿は2015年9月20日に北海道大学で開催された日本ホワイトヘッド・プロセス学会第37回全国大会で口頭発表した原稿に大幅な加筆・修正を加えたものである。

¹ ツィーマンによれば、形而上学にとっての「暗黒時代」は、カルナップの『言語の論理的構文論』の簡略版『哲学と論理的構文論』が英語で出版された1935年、あるいはエアの『言語・真理・論理』が出版された1936年に始まる。その後の四半世紀の間、哲学は、論理実証主義、ウィトゲンシュタインの静寂主義、オースティンに擁護された日常言語哲学といった反形而上学の運動によって支配され、形而上学は廃れていく。だが、この「暗黒時代」は、クワインの『論理的観点から』（1953年）の影響が広まる頃には終わり、1960年代以降には、ほとんどの伝統的な形而上学の問題の研究が再開されている。Zimmerman (2004, xvii, xix)、加地 (2015) を参照。

このようにツィーマンは、分析哲学は反形而上学的ではないというが、20世紀以降の英米の形而上学のうち、分析形而上学とは異なる形而上学としてホワイトヘッドらのプロセス哲学を挙げている (Zimmerman 2004, xi)。

² ホワイトヘッドの哲学は、ムーアやラッセルとは異なる仕方ブラッドリーを批判的に超克していく形而上学的思潮に位置づけるのが適当だと筆者は考える。ブラッドリーは、『真理と実在』（1914年）に収録された論文など、20世紀初頭においてもなお精神的に活躍していたばかりか、批判されるという形で強い影響を与え続けていた。W. ジェイムズの『多元的宇宙』（1909年）や、S. アレグザンダーの『空間、時間、神性』（1920年）などは、ブラッドリーに対抗した実在論的形而上学の本であるし、ホワイトヘッドが1924年から1947年になるまで展開した哲学も、ブラッドリーの絶対的観念論を批判的に超克した形而上学という側面をもつ。詳しくは、吉田 (2012)、吉田 (2014a) を参照されたい。

³ ホワイトヘッドの研究を困難にしている特有の事情がいくつかある。例えば、彼は50歳を過ぎてから哲学の著作活動を始めたため、独自のアイデアがいつどこで獲得されたか不明であることや、著作の改訂情報や草稿といった史資料があまり残っていないことなどである。ホワイトヘッドの研究史や研究上の難点については吉田 (2014b) を参照。

⁴ 飯田 (2007, 667-8) を参照。国内では分析哲学の歴史を扱った神野 (1991) が出版されている。

⁵ 1987年、ボローニャ大学で行われた英語講演をもとにし、1988年にドイツ語で出版された。英語版は1993年に出版されている。

⁶ Dummett (1993, viii)、ダメット (1998, v-vi) を参照。

⁷ 以下はDummett (1993, 4-14)、ダメット (1998, 5-17) の議論にもとづく。

⁸ Dummett (1993, 22-7)、ダメット (1998, 27-34) を参照。

⁹ Glock (1997a, viii)、グロック (2003a, 173) を参照。

¹⁰ Zimmerman (2004, xiii) を参照。また、飯田は、分析哲学の哲学史への貢献について、「言語そのものを対象とする分析を哲学的問題解決のための中心的方法とみなすという考えにある」と認めつつも、分析が常に言語分析を指しているとは限らないという。ムーアとラッセルにとって分析は、言語を対象としているのではなく、その対象は言語によって表現されている事柄だと述べる。飯田 (1994, 67-70) を参照。

¹¹ 以下はFøllesdal (1997, 7-10)、フェレスダール (2003, 27-32) の議論にもとづく。

¹² 邦訳では「反射的均衡」と訳されているが、本稿では「反照的均衡」と訳し直した。

¹³ ツィーマンによれば、ラッセルやムーアは曖昧さや厳密さの欠如を嘲ったのであり、彼らの革命は、伝統的な形而上学の問題の追放を意図したのではなく、より常識的、あるいはより理解しやすい仕方ですれらを解決しようとした革命だった（Zimmerman 2004, xiv-xx）。

また、神野は、分析哲学は特定の説を学ぶことではないと言いつつ、分析哲学の特徴として、問題解決的な方法を取ることや、問題のありようを見やすくするため、理性と事実と訴えて出来るだけ明晰判明な分析の仕方を選ぶことを挙げる。神野（1991, 291-306）を参照。

¹⁴ 飯田（2004, 53）を参照。飯田はさらに、理解の明晰さとしてウィトゲンシュタインの「完全な明晰さ」を挙げるが、ここでは省略する。

¹⁵ 一ノ瀬は、現代の分析哲学が扱っている主題は、存在論、認識論、倫理学、美学、形而上学と多岐に渡り、今日、『分析哲学』と称して、他の哲学の流れと対比させることにほとんど意義が見いだされなくなってきた」と指摘しつつも、「おもに英語圏で展開されている、経験科学や論理と結託した形で、できるだけ明晰な議論を心がける、といった大まかな特徴を持つ哲学の傾向として『分析哲学』という名称を用いることは、少なくとも間違っていないし、とくに日本では十分に通用している」と述べている（一ノ瀬 2010, 6-7）。

¹⁶ ムーアにとって分析の方法は、「ある複合的な全体について、どんな部分がそれを構成するかをみて、それら部分の各々を、全体から抽象し孤立させて考察することで、その各々の知識を獲得することにより、その全体を理解しようとする試み」であった（Hylton 1990, 143）。また、ラッセルにも、事実の構成要素が分析によって明らかになりうるという考えがあった（Zimmerman 2004, xiii）。

¹⁷ ただし、ホワイトヘッド哲学はブラッドリーより多元論的・実在論的である。詳しくは吉田（2014a）を参照されたい。

¹⁸ Reichenbach（1951, ix）を参照。

¹⁹ ラッセル（1959, 45）を参照。

²⁰ また、ホワイトヘッドは、哲学にとって「論理的矛盾はたいてい取るに足らない」（PR 6）ともいう。矛盾よりも、ある体系が、その範囲内で扱われるはずの経験の諸要素を含み損ない、十全ではないことの方が致命的になりかねない。そうした諸要素を体系内で解釈しようとするとき、不整合になることがあるからである。不整合があってもその哲学はしばらく受け入れられるが、その不整合が我慢ならなくなったとき、反動が始まる。「ある哲学の体系は論破されることはなく、ただ廃棄されるだけだといわれてきた」（PR 6）とホワイトヘッドがいうように、経験の諸要素を解釈できず不整合が容認できなくなると、その哲学の権威は失墜する。ここには、クワインやクーンたちの議論を先取りした考えがあると思われるが、稿を改めて論じたい。

²¹ より厳密には、事物である樹の物的な感受と、それを「～として」意味規定する観念的な感受の両方が、我々の統合的な経験の中へ対等に入ってくるとホワイトヘッドは論じる。

²² 最晩年の著作『思考の諸様態』（1938年）の第2章、第3章のテーマが「表現」と「理解」だったことは注目に値する。「表現」は、「環境の中で、表現者の経験において最初に享受された何かを伝え広げること」（MT 21）、「理解」は「自明性」（MT 50）と言い換えられるが、それらの語がもつ多様な諸相が考察されており、その解釈は稿を改めて論じたい。

²³ 例えば「社会」は人間の社会だけを指すのではない。複数の細菌が、「限定性格」を規定できるような秩序を形成し、実体的性格をもつとき、その集合は、ホワイトヘッドのいう「社会」の事例となる。逆に、そうした性格をもつものはすべて「社会」の事例であり、人間の社会は典型的な事例とはいえ、あくまでも事例の一つに過ぎない。ホワイトヘッドの用語は「通常の用法とは無縁の一般性」に拡張されて用いられているのであり、正確な意味はホワイトヘッドの哲学体系において理解されなければならない。

²⁴ ここでの経験とはあらゆる経験である。「何ものも除外することはできない。泥酔の経験としらふの経験も、眠っている経験と目覚めている経験も、うとうとしている経験とすっかり目をさました経験も、自己意識的経験と自らを顧みない経験も、知性的経験と物理的経験も、宗教

的経験と懐疑的经验も、不安な経験と心配のない経験も、予期的経験と内観的经验も、幸福な経験と嘆き悲しむ経験も、情緒に支配された経験と自己を抑制した経験も、光における経験と闇における経験も、正常な経験と異常な経験も。」(AI 226) この点においては、論証や正当化の最終法廷を生活世界に求めるフェレスダールの見解とも符合するようにみえる。Føllesdal (1997, 10-2)、フェレスダール (2003, 32-5) を参照。だが、本文でみた通り、論証の重視や正当化の方法は、ホワイトヘッド哲学と分析哲学とでは根本的に異なっていると考えられる。

[参考文献]

- ホワイトヘッドの著作からの引用は以下のように略記し、当該箇所を頁数を付記する。
- Whitehead, Alfred N. & Russell, Bertrand. 1962. *Principia Mathematica* to *56, Cambridge University Press. (PM)
- Whitehead, Alfred N. 1955. *Symbolism*, Fordham University Press. (S)
- . 1978. *Process and Reality*, David R. Griffin & Donald W. Sherburne (eds.), The Free Press. (PR)
- . 1967. *Adventures of Ideas*, The Free Press. (AI)
- . 1968. *Modes of Thought*, The Free Press. (MT)
- Dummett, Michael. 1993. *Origins of Analytical Philosophy*, Harvard University Press. ダメット, マイケル. 1998. 『分析哲学の起源』, 野本和幸他訳, 勁草書房.
- Føllesdal, Dagfin. 1997. “Analytic Philosophy: What is it and why should one engage in it?,” in Glock 1997b, 1-16. フェレスダール, ダグフィン. 2003. 「分析哲学—なにが分析哲学か、なぜ分析哲学か—」, グロック 2003b, 15-42.
- Glock, Hans-Johann. 1997a. “Introduction,” in Glock 1997b, vii-xiv. グロック, ハンス-ヨハン. 2003a. 「序」, グロック 2003b, 1-14.
- Glock, Hans-Johann (ed.). 1997b. *The Rise of Analytic Philosophy*, Blackwell Publishers. グロック, ハンス-ヨハン編. 2003b. 『分析哲学の生成』, 吉田謙二他訳, 晃洋書房.
- Hylton, Peter. 1990. *Russell, Idealism and the Emergence of Analytic Philosophy*, Clarendon Press.
- 一ノ瀬正樹. 2010. 『功利主義と分析哲学』, 放送大学教育振興会.
- 飯田隆. 1994. 「存在論の方法としての言語分析」, 『分析哲学とプラグマティズム』, 新田義弘他編, 岩波書店, 67-94.
- . 2004. 「分析哲学としての哲学／哲学としての分析哲学」, 『現代思想』, 第32巻第8号, 青土社, 48-57.
- . 2007. 「クワインとクワイン以後」, 『哲学の歴史』, 第11巻, 飯田隆編, 中央公論新社, 607-70.
- 加地大介. 2015. 「訳者解説 分析哲学のなかのアリストテレス的形而上学」, 『アリストテレス的現代形而上学』, トオオマス E. タフコ編, 加地大介他訳, 春秋社, 3-14.
- 神野慧一郎他. 1991. 『現代哲学のバックボーン』, 神野慧一郎編, 勁草書房.
- Reichenbach, Hans. 1951. *The Rise of Scientific Philosophy*, University of California Press.
- ラッセル, バートランド. 1959. 『自伝的回想』, みすず書房.
- 吉田幸司. 2012. 「過渡期ホワイトヘッドの神論—アレグザンダーの創発的進化論と対比した発展史研究」, 『プロセス思想』, 第15号, 日本ホワイトヘッド・プロセス学会, 127-38.
- . 2014a. 「ホワイトヘッド形而上学の意義—F. H. ブラドリーおよびW. ジェイムズと比較して」, 『理想』, 第693号, 理想社, 121-34.
- . 2014b. 「現実に臨むホワイトヘッド哲学—研究方法の反省から方針の提唱へ—」, 『プロセス思想』, 第16号, 日本ホワイトヘッド・プロセス学会, 211-22.
- Zimmerman, Dean W. 2004. “Metaphysics after the Twentieth Century,” in *Oxford Studies in Metaphysics*, Vol. 1, Dean W. Zimmerman (ed.), Oxford University Press, ix-xxii.